

オーバーロード惨地直送便

性惨者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲスなあなたは、誰に憑依しても死の運命から逃れられない

あなたの憑依先は必ずしもゲスキャラに限られないが、その末路は総じて悲惨だ

一話・二話↓ベリユース隊長（完全憑依）

三話・四話↓クレマンティヌ（憑依するも本人の精神と同居）

★あなたは常にゲスで常に少女が大好きだが、憑依先は男女を選べる立場に無いため、TS状態で少女を求める事もあるため一応「ガールズラブ」のタグを適用する

★あなたが百合百合しいわけではない。今のあなたは肉体に関わらずロリコンだ

目次

第一話	スレイン法国の御曹司	壹
第二話	スレイン法国の御曹司	弐
第三話	スレイン法国の逃亡者	壹

10

6

1

第一話 スレイン法国の御曹司 壺

異世界転移。それもファンタジー世界。とりあえず裕福な身分。

それは、世界を救うような特別な能力を持たなかったとしても、充分にハライソだ。

キリツとした顔で娼館から出てきたあなたはそれを実感している。

この世界でのあなたは、そこそこ裕福な家の生まれの人間に成り代わっており、その資産もそれなりに活用できる。

ファンタジー世界にしては良心的な法が整備されているこの国だが、ヒステリックで余計な部分はない。よって、娼館ではきちんと魅力的な年齢の少女と楽しむことができる。それも、少女の方が安い。初物をもつと安い。まさにハライソだ。

そう、これこそあなたに与えられた異世界チートに違いない。この世界の人間にはインターネットなどというイカ臭いインフラが無いので、性的な知識が乏しい。そうなれば、面倒な初物やこなれていない少女など商品価値は低くなる。娼婦といえども人間であればそれなりに尊重されるこの国では、少女に必要な以上の恐怖や苦痛を与えずに「水揚げ」を済ませてくれるあなたは娼館にとって上客であり、安価で様々なサービスを受けることができた。

思えば上がらないでほしい。あなたの技術はかつてイカ臭いインフラから長い時間をかけて修得しただけの拙いもので、ひたすら時間をかけるだけの退屈なものだ。それでも、性的な知識が乏しい社会の娼館で優しく「水揚げ」ができるあなたは貴重な存在だ。

もちろん、あなたほど裕福で、夜の行為を優しく行える者もいないわけではない。しかし、そういう者は普通は異性に困らず、この国では育ちが良ければそれなりの宗教教育を受けることになる。そこでは、あなたのように貪欲な人格が形成されにくいのだ。まして、善良でありながら少女に対してのみ執拗な性欲とねっちよりとした優しさを併せ持つ人材など稀有にも程がある。

また、ただ幼ければ良いのであれば、この国には奴隷とされているエルフという種族がいる。あなたと近い嗜好の者であっても、乱暴に

扱うことが許され成長も遅いエルフが売られている以上、あなたが居た世界の歴史と違って「水揚げ」が得意な客が育ちにくいのだ。あなたも、財布を委ねてくれている楽隠居状態の親父様が奴隷すら家に入れたがらない異種族嫌いであれば、迷わず幼いエルフを買っていただろう。

そして、あなたは金を使いすぎた。

少女だけなら一生買い続けることができた。しかし、その少女の身体を包み込むための夢の値段がまずかった。

あなたが仕立て屋で特注した袖口と襟口が紺色の綿のシャツは白地ということ値段が一段上がり、リアルな触感を求めると特上綿という素材になってしまった紺色のぴったりとしたシヨーツ型下半身衣料はさらにとんでもない値段になった。そもそも、工業化されていない世界で趣味のための服を数着発注するなどとんでもないことだ。金額の桁数を確認し直した時には全てが手遅れだった。

そう、異世界転移とは一面で賢さを、そして一面で愚かさを持ち込むことなのだ。逆チートのリスクを把握せねば簡単に詰む。モニターや書籍に向けてクラウチングスタートのポーズを取って後に続かんとする者たちはへ能力向上へ能力超向上などと身勝手な祈りを捧げる前にそういうことを肝に銘じておかなければならない。

こうして、あなたは初めてこの世界での立身出世を考える。幸い、娼館での信頼は厚く、しばらくはツケで楽しめる。そして仕立て屋もその娼館からの紹介なので支払いを急かすことは無い。しかし、その限られた時間に国が募集する実入りも良い仕事が見つかったとなれば、それに飛びつかざるをえない。



何の変哲もない武器と防具を用意し、あなたは神官とは思えない金髪丸刈りマツチョに跪く。はつきり言って怖い。彼の名はニグン・グリッド・ルーイン。あなたが元いた世界ならば反社会的勢力の若い連中の頭を張っていいような人相だが、彼は任務に忠実な特殊部隊の長であり、敬虔な神官だ。

彼の声はダンディで厚みがありながら粘っこい。そのあたりから

そこはかたなく嫌な予感が漂うが、この仕事に危険は無いはずだ。隣国の騎士の鎧を身につけ、ろくに武装もしていない別の隣国の村々を襲って罪をなすりつけるという卑劣な任務。高い報酬はその卑劣な内容の口止め込みということだろう。家族には過酷な軍事作戦だと伝えられるばかりか高額の前金を預けてもらえるため、その任務の卑劣さが周囲に知られることはない。それどころか、生きて帰れば英雄扱いかもしれない。いまいち使えない跡取りを心配するような親父様の見る目も変わってくるだろう。そうなれば、家の敷地内にエルフを連れ込むことだって許されるに違いない。

そうだ、この戦いが終わったら庭に小さな離れを建てよう。

そこで、可愛いエルフの女の子たちと楽しく暮らすのもいいかもしれない。

あなたは、出発の日まで必死に繰り返した剣術と馬術の特訓を思い出す。元いた世界ではしたことが無いような努力も、少女たちを思えば辛くはなかった。それどころか、その特訓を特殊部隊の関係者に目撃されて評価が著しく高まつたくらいだ。家柄の良さと、宗教的な良心による躊躇がないことも幸いし、あなたは隊長に抜擢された。非常に幸先が良い。



あなたはゲスではあるが、少女が大好きだ。可憐な少女が無垢なまま錬金術油をかけられ家ごと焼かれるなどという非道な運命を到底見過ごせるはずもなく、あなたは行く先々で少女たちを助けた。

もちろん、金髪丸刈りマツチヨで魔法まで使うチート野郎が率いている特殊部隊に逆らう勇氣があるはずもなく、正面から命令違反はできない。事が終わるまで大人しくしていれば助かると言うのと、覆いかぶさるあなたの下で少女たちは子鹿のように震えていた。そして事が終わる頃には別人のようにキリツとしたあなたが少女の命を救う手段を冷静に模索し粛々と実行していく。

あなたにゲスを見る目を向ける狂信者どもは、平然と家々に錬金術油をかけて住人ごと焼き払っていく。人間、ああなつたらお終いだ。あなたは本能に従って自分自身のためだけに助けたいものを助けつ

すなわち、この咆哮は金のマツチヨが呼んだ白いマツチヨだ。任務最後の大盤振る舞いに違いない。それでももう安心だ。きつと効果は抜群だ。

あなたは颯爽とマントを翻し、後ろを振り返ることもなく戸惑う部下たちを叱咤して村人の間引きを指揮する。この瞬間、あなたはまさしく隊長だった。

あなたに対抗意識は無い。ただ声量が恐怖に変換され、それが再び声量に変換されただけだ。声量保存の法則だ。普通の主人公なら無駄に心が強いのであまり見かけない状況だが、精神にダメージが全量そのまま通る場合は大抵こうなる。

次の瞬間、巨大な盾があなたに迫り、全身に衝撃を受ける。世界が回転する。

あなたは異世界チートを発動し、武技〈受け身〉を使用する。一度目に地面に叩きつけられたダメージを半減させるが、二度三度と回転しながら吹っ飛ばされるうちに腕が変な方向へ持つていかれて肩と肘に激痛が走り、腕が自分のものでなくなったような不思議な感覚に驚かされる。

解放骨折。

あなたは理解した。この痛みが全て意識へ流れ込んできたら、あなたは死ぬ。

痛い。そうならないということは、ギリギリ死なない程度の激痛だけがあなたの意識へ流れ込んできているということだ。痛い。痛い。チートなのかもしれないが、ありがたくないことだ。痛い痛い。そもそも、あの打撃で即死しないのもおかしい。痛い痛い痛い。きつとこの身体は人間ではない。痛い痛い痛い。違う生物なら、全てがこちらへ流れ込んでこないのも頷ける。痛い痛い痛い痛い痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!

痛みが抑えられているのはわかっているが、それでも痛い。こんなチートは要らない。そこらに部下たちの死体が転がっているが、あなたの方がまだマシではないかとさえ思う。

「ひ、ひしゃまらー！ あの化けもによをおしやえよ!!」

あなたはまだエルフを買っていない。こんな所では死ねないとはかりに張り上げた声は音程が狂ってしまう。そして、誰も動かない。

「かにえ、かにえをやりゆー！ 五〇〇ひん貨！ えりゆふもつけうぞー！」

あなたはまだエルフを買っていない。それを空手形としてまで添えるあたり、その想いの強さに自分でも関心する。

「オボボオオオオオ……」

あなたはまだエルフを買っていない。すなわち、逃げなければならぬ。その時に、足首を掴む者がある。両断された部下の死体だ。あなたよりラクな死に方をしておいて、隊長の脚を引っ張る不屈者だ。

「ふぬっ！ ふぬっ！ ふぬっ！ ふぬっ！」

あなたはまだエルフを買っていない。身体が半分しかなく武器も持っていないゾンビなどに負けてたまるものかと蹴りまくる。不自然な存在に怯えず抵抗できるのも一つのチートかもしれない。そして、あなたは体格が劣る者には極端に強気になれるのだ。相手は半分しかない。負ける気がしない。

「ふぬっ！ ふぬっ！ ……ヒイツ、ヒイイイイツ！」

あなたはまだエルフを買っていない。その心残りから、この身体にあつては異常とも言える力を絞り出して、体格が半分しか無いゾンビを必死に蹴って逃れようとしているが、黒いマツチョコが迫ってくる。あれは巨大な騎士のゾンビだ。相手は倍以上の巨体だ。勝てる気がしない。

「——おぎゃあああ!!」

あなたはまだエルフを買っていない。腹に突き立てられた波打つ刃のフランベルジュがあなたを大地に綴じ込め、限界までの痛みがあなたの精神を塗りつぶしていく。

「たじゆげでえ!! なんでもしまじゆ!! おかにえ! おかにえいっばい! えりゆふもあげまじゆ!! えりゆふ!! おかにえ!! えりゆふ!! おかにえ!! えりゆふ!!」

あなたはまだエルフを買っていない。まるで取引をせがむかのようにつぶれたのは、痛みが抑えられ意識を失うことができないうの、間近に迫る死のために思考力だけはきつちりと衰えてきているからだ。すなわち、最後に残ったあなたの一欠片はこんなものだということだ。

「ふむ、エリユフというのは何だ? ユグドラシルのエルフと何か関係があるのか……」

あなたはまだエルフを買っていない。しかしあなたの叫びは誰か

の耳に入ったのだろう。薄れゆく聴覚で捉えた言葉は、おそらくあなたの敵のものだ。

あなたは結局エルフを買えなかった。なぜなら、あなたは死んだからだ。しかし、次のあなたはきつともつとうまくやるだろう。

あなたがこの場に存在したことで、法国におけるエルフ奴隷は本来の運命よりいくらか早くに解放されることとなるが、その因果関係を知る者は誰もいない。

自分が味わえない旨味なら誰も味わえないよう消してしまう方向へ後押しするというのは、ゲス異世界転移者の鑑とも言える結果だ。ここだけは、きつとあなたも本望だろう。



最初のあなた——ベリユースはエルフの国との戦いで死亡した勇者として、神都のはずれの小高い丘にある石碑に名を刻まれた。あなたの任務は国が存在を認めてはいけないものなだから、これは当然のことだ。報酬からきつちりツケを払ってもらった少女娼婦たちは、そこを訪れてあなたの冥福を祈ってくれたらしい。娼館の常連の中では、ツケを払うために戦場に赴くような真摯な男は希少だからだ。

なお、ベリユースが財産の殆どを費やした珍しい衣装は、幾つかの好事家や古道具屋の手を経て、漆黒聖典第七席次の手に渡った。

六大神の遺したアイテムと瓜二つのそれを見つけた第七席次は涙を流して感動し、市井に流れていたそれら全てを買い集め、任務の無い時の普段着として六大神を身近に感じて暮らす喜びを噛み締めたという。

その後、その情熱は第四席次、そして番外席次にも波及し、数十年後には予備役の巫女姫の衣装に指定され、ついに数百年後には女性だけの新たな聖典が編成される際に正式に採用されたと伝えられる。

第三話 スレイン法国の逃亡者 壺

今度のあなたには仲間居ない。しかし、決して孤独ではない。むしろ独りの時間が懐かしいくらいだ。

世界のことを知ろうと書物を漁った学習タイム、心沸き立つ娼館の行き帰りの妄想タイム、ぶるまあの構造を思い出しては書き留めた情熱タイム。前世で孤独そのものだったあなたは、こちらでは独りの時間を楽しめるほど心に余裕ができていた。それが、今は懐かしい。

あなたは街から街へ、街道から街道へ、たった一人で走っていた。野生の獣にでもなったかのように今の身体は驚くほど軽いが、やはり走るの好きではない。逃げるより隠れる方が正解ではないかと思うのだ。

【それじゃ風花聖典に見つかるって何度も言ってるでしょーが！ 行きずりの女から身勝手に大切なものを奪っておいて今更何を寝ぼけたこと言ってるのよ！】

奪ったのはあなたではない。あなたの知る限り、裸みたいな格好をした幼女から、こともあろうに額飾りだけを奪ったのはこの女の所業だ。本当に勿体無い。

【あなたは私のカラダを奪ったでしょーが！】

あなたが奪ったのは美味しそうな女の子の身体ではないのでノーカンである。あなたにとっての適齢期を過ぎているのだ。

それにしても惜しむらくはあの幼女だ。額飾りなんかより本体を担いで逃げるべきだったのに、この女ときたら！ 本当にけしからん。そして何より勿体無い。

【ぴっちぴちのこのクレマンティーヌ様のカラダを強引に奪っておきながら、ノーカンとか適齢期過ぎとか酷すぎない？ ちよつとこの口リコンさいてーなんだけど！】

ロリコン
紳士は褒め言葉だ。問題ない。

このうるさいのはクレマンティーヌという宿なしだ。あなたのストライクゾーンを外れているにもかかわらず、あなたにずっとくっついてきている図々しい女だ。とつくに身体を失った宿なしのくせに、

昼夜を問わずやたらとうるさい。

「くっついてきてるのはてめえだろ糞が！ ああもう、ふざけんなつての。なんでてめえみたいな変態が私のカラダを動かしてるわけ？ そういう神器でも盗んだの？ だったら人外のおんちくしようでも乗っ取って暴れなさいよこの役立たず！」

あなたは笑みを浮かべて聞き惚れる。

罵倒が心地よい。何より、声がいい。この声で罵倒されるならもうずっとこの身体に留まっていたい。発声はしていなくとも、脳内に響く声がいいのだ。

これで身体の方があなたのストライクゾーンから外れていなければ心が腹上死して今話あたりが最終話となってしまうに違いない。

「喜ぶな変態！ だいたいストライクゾーンって何なの？ このぴちぴちの極上美女クレマンティーヌ様で興奮しないって、人類のオスとして失格だと思っただけ！」

あなたは、この女が適当な街の宿に路銀が無くなるまで閉じこもって自分の身体を弄り続ける展開を望んでいたことに軽く驚く。

活動的でアウトドア志向に見えるこの女がそんな淫猥な快楽漬けの生活を望むなど、あまりにギャップが大きく、その部分だけはさすがのあなたでも若干萌えなくもない。

「てめえは猿か！」

あなたは最高の笑顔で女にこたえる。この身体は少し口が大きいので、歯をキラんと光らせるのも簡単だ。

もし憑依した先が好みの女であればそれくらい当たり前のことだろうに、この女は何を驚いているのか、あなたは本気で理解に苦しむ。「ふー。もういいや。ちよっと納得いかないけど、この変態の餌食になつたら廃人になるまで自家発電してやつれ果てたところを風花に発見されるとか笑えねー未来しかなさそうだからね。そんなのその場で死にたくなるし、運ばされる風花も気の毒だわ」

女のあまりに失礼な発言にあなたは驚き戸惑ってしまう。

あなたは美少女が相手ならばきちんと栄養を与え健康な状態を保ちながら合意のもとで何年でも楽しみ続けたいと思うほどの紳士だ。

紳士の嗜みに理解の無いこの野蛮な女の言葉には心を痛めざるをえない。

【年単位かよ!!】

ところで、あなたは自分の身体の純潔がどうであるか、少しだけ気になってる。

これは喫緊の課題だ。果たしてこの女はどちらなのだろうか。

【……普通そういうこと聞く？ ホントもうこのロリコンさいてーだね。私のカラダに興味無いんじゃないのかよ】

誰も露骨に聞いてなどいない。声に出すことさえなく、ただ思い浮かべただけだ。

あなたは、何故かこの世界の娼館に少し詳しい。少し大きな街の娼館なら女の客が女を買うための道具だって用意してある。あなたは金さえあればどんな身体であつても機会さえあればすぐにそこへ飛び込んでいきたい。

ただ、あなたは少女を買うことをライフワークにするのは吝かではないが、男が一生味わうことのない種類の痛みを体験するのは御免被りたいのだ。まさか二十歳過ぎたら行き遅れのこの世界で、こんな性格の女がこんな歳まで純潔を守り続けていると思うほどあなたはおめでたい人間では無いのだが。

【死ぬ!! 今すぐ死ぬ!! ……つてか真面目に逃げてよホント。捕まったら拷問なんだからね。私も痛いんだから】

どちらが意識の手綱を握っていても、すつ転べば二人とも痛いことはわかつてる。それを途中の街の石畳で証明したのは、もちろんあなたの側だ。

それはともかく、あなたは先に希望があれば頑張れるタイプだ。痛い思いをせず少女たちのハライソを楽しめる確証があれば、きつと逃げ足も早くなるに違いない。嫌らしい笑みを浮かべながら手鏡を求めて市場を彷徨ったり、下半身裸で宿に籠ってじっくりと研究したりもしないで済むだろう。

【うるっさいなー。……はああ。そうだね。今さら痛みとかは無いだろうね。ふん、別に男には関心は無いけど仕事柄色々あったんだよ。

兄貴をこの手で殺すまで男とかどうでもいいし」

なんと、クレマンティーヌはヤンデレ妹属性持ちだった。あなたは時の流れの残酷さを呪わずにはいられない。これが少女の体であれば本当に第四話までもたなかったかもしれない。

「何言ってるか全然わからないけど、まあた胸糞悪い話をされているような気がするな」

その声であなたのことをお兄ちゃんと呼んでくれれば、そのことが理解への第一歩になるに違いない。

「わっかたたくもないわ。気持ちわるー。死ねば？」

あなたは少し落ち込むが、やはりこの声、罵倒を貰い続けるのも悪くない。声だけでも元の世界へ連れて帰りたい逸材だが、こちらの世界の方が快適なので連れ歩くだけで我慢する。そもそも超自然的な理由でこうして声が聞けるだけでも儲けものなのだ。たとえ実際には、この女の脳に残っている自分の声のイメージが再生されているだけであっても、ごはんのお供としての性能は普通の音声と何ら変わることはない。

こんな形で精神が共存する理由は彼女の精神の強さか、あるいはあなたの弱さか、その両方かもしれない。この女の強靱な精神によって、あなたごときの脆弱な精神が押し潰されずに済んでいるのは、やはりチートなのだろう。

もしチート抜きの状態でこちらの世界で出会ったらあなたなど気分転換に殺されるだろうし、元の世界で出会ったらあなたなど彼女の口の悪さで精神的に殺される。あなたがクレマンティーヌとまともに会話ができるのは、脆弱なあなたをすり潰さずに残してくれる憑依というチートと、彼女があなたのいた世界のJC・JKスラングを習得していないという幸運のおかげでしかないのだ。

クレマンティーヌの言っていた城塞都市エ・ランテルは、もうすぐだ。走り慣れている身体で走るというのは意外なほど心地良い。元の身体では一生知ることができなかった世界ではあるが、高揚する気分の方はランナーズハイではなく罵倒ハイなのだろう。元の世界には特定の声優の罵倒音声をプレーヤーに溜め込んでリピートしながら

ら長距離を走るランナーもいるというので、どちらも似たようなものかもしれない。

街の入口には商人が行き交い、平和そのものだ。前世のゾンビ・パ
ンデミックの地からそう遠くないことから、あなたはゾンビが街に溢
れていたなら一も二も無く逃亡すると予め宣言していたのだが、拍子抜
けだ。



ありのまま起こったことを思い返す。

あなたは恥ずかしくなつて最初の作戦を放棄したら、いつのまにか
ワーカーたちの大半を殺し尽くしていた。

なめられないように最初はステイレットを持って、というのはクレ
マンティーマンから出された最低限の条件だった。それでも、やること
は女の武器を使つての説得のつもりだった。

これはお仕置きのつもりでもあった。金も払わずにワーカーを使
おうなどというクレマンティーマンのずさんな計画にあなたは頭を抱
え、何人が殺して脅すか武器に込められた魅了の魔法でどうにかすれ
ばいいというクレマンティーマンの外道脳筋ぶりにドン引きしていた。
あなたは自身の事を棚にあげつつ、このゲスな女を一度懲らしめてみ
たいと考えた。だからこそ、クレマンティーマンが一番嫌がるであろう
方法を実行したのだ。

もちろん、あなたがクレマンティーマンの声帯から出る媚び声を存分
に堪能したいという揺るがぬ目的もあったのだが、これは当然の役得
というものだ。

しかし、媚び声というのは魅力的な媚び演技が伴わなければどうに
もならない。あなたにそんな才能は一片たりとも無かった。

世の男性諸氏よ、世界の半分は女性である。ゆめゆめ忘れることな
かれ。

特に異世界転移（憑依タイプ）をお考えの諸兄は是非とも演技の練
習をしておくべきだと、あなたは真摯に呼びかけた。それも、主に
過去のあなたに対してだ。

そして、棒読みの萌え台詞をそこの男へ向けて乱打して無事でい

られるほど、あなたの精神は強くなかった。これは他人の身体であっても、他人事ではないのだ。精神耐性に至っては相変わらず全てのダメージが貫通している。豆腐メンタルどころではない。その防壁は隙間の部分しかないザルだ。

あなたはすぐに耐えられなくなって取り乱し、腰の鞆にステイレットを戻すと男たちを殴り倒した——はずだった。

「こうすることが正しいって信じて握っている……だから、簡単には離さないよ！」

クレマンティーヌは強い心であなたに抵抗し、ステイレットを握り続けていた。

周囲は血まみれ、手に残るのは肉と骨を貫く嫌な感触。あなたの奥底に封じ込められているはずのクレマンティーヌのドヤ顔が目に見えるようだ。

あなたが腰の鞆に戻したはずのステイレットは、あなたの指が食い込むのではないかというほど強く強く握られたままだ。

あなた以上に耐え難い精神的苦痛を浴びせられたクレマンティーヌは、チートすら破る脅威の精神力でステイレットを握る手に、ひねる手首に全力を傾けた。すなわち、あなたの殴打を刺突に変えた。

元々、あなたの身体にとつてはその場に居るだけで胸糞悪い存在（下手な演技を見せて勝手に恥じらうあなたが悪いのだが）を殴り飛ばすこととステイレットで刺殺することは等価だった。素手なら殴り、ステイレットなら刺殺する、人を殺し慣れたこの身体にとつてその違いはじゃんけんでグーを出すかパーを出すか程度の些細なもので、そこにクレマンティーヌのつけ入る隙があったのだ。

つまり、あなたが大量殺人を行ったのは、この殺人狂の日々の研鑽の成果ということになる。

そうなるまでのクレマンティーヌの日頃の行いを考えるとあなたは頭が痛くなるが、最初から夜逃げ中だったのが不幸中の幸いだ。少女の額飾りなんぞ盗らなくてもこの女はいくらでも罪科を貯めこんでいたのではないだろうか。

あなたは敗北者らしい死んだ目のまま、生き残ったワーカーにクレマンティーン指定のステイレットを突き刺し、言われるがままのイメージで魔法を発動する。

結局、血まみれの路地裏も、仕事を言いつけられてふらふらと去る男も、全てが脳筋の計画通りになってしまった。あなたは敗北感に打ちひしがれながらも、逃亡資金として死者の財布を確保する。その際なんとなく懐を確認すると、なんと普通にワーカーに依頼できるほど金貨を持っていた。

【んふふ、あんな雑魚に金払つてもしょうがないじゃない？】

あなたは深く溜息をつくとき、金を払うべき先を心に決めてフラフラと歩きます。あなたはグロを見せられ体感させられ、消耗した。今ここで必要なのは、癒やしだ。

【ちよつと、どこ行くの？！】

わかりきっていることを聞かないでほしい。あなたの目的地は娼館という建物の形をした癒やしそのものだ。

【わけがわからないよ！ そんなことしてる場合じゃないよね？ 馬鹿なの？ 死ぬ！】

時間ならある。あなたはクレマンティーンの言いなりに、墓地の中で怪しげな儀式をしている陰気な禿と手を組み、ある男をさらって裸にひん剥いて薄衣一枚の変態みたいな格好をさせるとい実りのない仕事の準備を始めているが、今はその男の帰りを待っている状況だ。

勿論、あなたの性愛方向が変化したわけでもなく、禿もそういう趣味があるわけではない。

あなたたちがやろうとしているのは、高い位階の魔法を使えるようになるというマジックアイテムを使ったテロ行為だ。どんなアイテムでも使用できる能力を持つというその男に使わせ、不死の軍勢を呼んで街を滅ぼすという計画だ。そこまでの理由が単に騒ぎを起こして追跡の目をくらすためだというのだから、本当にこれはとんでもない女だ。

ゾンビ・パンデミックで命を失ったばかりのあなたは抵抗したが、

この体なら逃亡も容易

しかし、今はそんなことはどうでもいい。

あなたは大きな口にだらしない笑みを浮かべて娼館へと入っていく。

「そんなのつてないよ！……こんなの絶対おかしいよ！！ 出てけ！！ 死ね！！」

それは先程のワーカーたちの、そして数日後のエ・ランテルの人々の台詞であるべきだ。そして、計画を聞かされた瞬間のあなたの感想でもある。あの時、額飾りごと幼女を持ってきていれば、男なんぞひん剥かなくても済むのだ。逃げ足だって幼女を抱えたあなたなら五割増しで速く走れただろう。

◆◆◆
そして、久々にやってきた娼館、それは金さえあればわけ隔てなく客として快樂を得られる素晴らしきハライソ。

それはクレマンティーヌの肉体に入っているあなたとて例外ではない。

あなたは、入店直後にノータイムで広げられる男娼のリストを断り、いささか鼻の穴を広げ気味の表情からニンマリとした笑みを作つて若い娼婦を要求する。

幸い、娼館の従業員は誰一人としてあなたの性別を訝めることはない。あなたの浮かべる肉食獣の笑みが、あなたの嗜好を雄弁に物語っているからだ。

そして、この場所のプロフェッショナルたちはあなたの想いに十分に応えてくれる。当たり前のように娼婦を用意してくれるだけではなく、あなたが今の身体で愉しむための道具までもがきっちり料金内で用意されたのは軽い驚きだ。

◆◆◆
この天使が、十八か。あなたの心は沸き立っている。

【本気？・本気で私がコレやんの!?!】

あなたは少女に飛びつくと、少女は無抵抗にベッドに倒れ込む。やはり異世界、栄養が足りていないのか身体が薄く、年齢の割にず

いぶんと未成熟な感じがする。上背だけが、かろうじて十八と言っても通用するかどうかという印象だ。

少女を押し倒した形になったあなたは、そのまま自然に態勢を整えた——つもりでいたら、なぜか少女に馬乗りになっていた。

体を自然に起こしたただけのつもりで、膝で少女の両腕を抑え込んでいた。

次にどこを殴れば行動力を奪えるかまで、なんとなく理解できた。あなたは自分の行為に大いに戸惑う。この身体は余計な所が高性能だ。

なぜ娼館で少女娼婦を相手にマウントポジションで打撃を与えようとしているのか。

この身体はやさぐれている。愛が必要だ。あなたはそう考える。

「や、いらぬから。お断り。サヨウナラ。むしろ今すぐあんたを抑え込んで動かなくなるまで殴り続けたいね」

あなたはツンデレという言葉を思い出し、白い歯を見せて嗤った。きつとクレマンティーヌも気持ちよくなるさと、気持ち悪く嗤った。

そして少女の横へ我が身を転がし、少女の身体を念入りにまさぐっていく——。



こんな子が十七だった？ あなたの心は沸き踊る。

「え、ちよつと、まだヤンのお……」

大丈夫だ。あなたの身体は道具を介した行為に結構慣れてきている。

そもそも、この身体にはインターバルなど必要ないのだ。

もちろん、あなたの心の芯棒は少女の中を埋め尽くし溢れんばかりに魂の飛沫をびゆるびゆるとほとばしらせていたつもりだが、肉体的な消耗自体は殆ど無い。むしろ、時間をかけたことで道具との接点の潤いが増え、色々とラクになってきたくらいだ。

「もう駄目だよ。こっちの心はボロボロだよ……」

あなたは女の無尽蔵の体力に感謝しながら、年齢よりずっと幼い少

女をベッドへエスコートする。



あなたは瞠目する。こんな、こんな十六があつていいのか！

「あーのさー、さーつきから思ってたけど、そんなわけないでしょーが。面倒臭いって思われるからごまかしてんのはよ童貞」

黙れっ!! 夢を壊すなっっ!! 邪魔をすると路上で脱ぐぞ!!

「あーハイハイ、もう死んでよー」

あなたは少女の全身を舐めるように見る。またも、幼い。

あなたは神に感謝する。あなたの知るあらゆる神に感謝する。こちらの世界の六大神にも感謝する。

せつかく年齢より幼く見える少女が続いているのだ。この豪運が続くうちに、体力の続く限り行為に及ばねばならない。最高の気分の所へ興が覚めることを言う女に憤慨しつつも、あなたはいそいそと少女の服を脱がしていく。



十四だと!!

あなたは魂を震わせる。こんな未発達な……異世界にしても何たることか!

「ぶぶぶ、だからガキすぎて面倒だつて客に思われないうちに適當言つてんだよ。いかげんわかりなよ糞童貞」

な、ななな何だと、ももももう一度言ってみろ。

「あ? えーと、くそどうてい?」

あなたが聞きたいのはそこじゃない。

そもそもあなたも前世でやることやっているのだから言いがかりであるし、そこは問題ではないのだ。

「んん? あー、だからガキが自分を高く売るために上の数字言わされてんだよ。何でそんなこともわからないわけ? 童貞こじらすにも程があるでしょーに」

ロリが背伸びしている、だとおおっ!!

「娼婦のガキが上以外どつちに誤魔化すのよ。横？ 斜め？ あんた本当に頭悪いんじゃないの？」

ぶばあああああつ!!

「お、お客様！ 大丈夫ですか!？」

さながら赤い噴水。あなたは盛大に鼻血を吹いた。血まみれの幼い少女天使は健気にあなたを心配してくれる。

「ちよつと何？ 死ぬの？ やつと死ぬの？ 死ぬなら体は巻き込まないで！」

気が遠くなりかけるが、魂の存続を賭けて途切れそうな意識にしがみつく。今この意識を手放したら、二度と戻れないような気がしたのだ。

そして、あなたは小鹿のように震える体を起こし、心配そうに覗き込む少女天使を抱擁する――。



【糞が……この変態淫獣……一晩中とか頭おかしいだろ……童貞色魔……ほんと殺したい……このキチロリ野郎……】

キリツとした顔で娼館から出てきたあなたは、止まらない罵声のご褒美にご満悦だ。一晩中、幾人かの少女を楽しみながらひたすら罵倒され続けるという稀有な体験は、あなたの心と魂の汚れをすっかり洗い流した。少女たちに告げられた偽りの数字もあなたの妄想力を大いに刺激し、魂の芯棒は勃ちつぱなしだ。路銀さえ考えなければ三日三晩でも七日七夜でも不眠不休で楽しめそうな感じがする。

あなたは、このすがすがしい朝に陰鬱さを漂わせるクレマンティーンが心配でならない。こういう眩くような罵声を戴けるのも悪くは無いが、気分が悪いのなら無理をしてくれなくても良いのだ。

【誰のせいで心が折れかかっていると思ってるんよこのクズ童貞】

あなたはいつまでも童貞呼びわりが続くことに納得のいかない部分もあるが、あなたがあなたであった頃は確かにそういう状況だった。憑依先では状況は違うのだが、心が男でありながら生えていない以上は一生この言葉と付き合っていかなければならないのだと理解はしている。そもそも、この声でそう呼ばれることは嫌いではないの

だ。

「……死ねよ変態、マゾ豚、ロリコン、チン○脳、種なし、エロ猿、◎★▽×、◇■◎※▲!!」

あなたはあなたの中のクレマンティーヌが元気になってきたことで安心する。近頃は彼女の罵声を浴びられない人生など考えられないほどに馴染んできているからだ。

与えられる罵倒は非常に多岐にわたっているが、心の奥底では童貞を捨てたつもりあなたは余裕で受け流せる。惜しむらくは、その中に「ヤ○チン」という類の表現が無いことだろうか。

「いや、だってあんた自分の入れてないから童貞だし」

嫌いではないのだ。本当にクレマンティーヌの罵声は嫌いではない。むしろ愛していると云ってもいい。なのに、

目の端に涙が浮くのはなぜなのか。

スレイン法国でひたすら娼館に通った日々を思えば、素人○貞だと訂正したくもなるところだが、そんな気力さえ出ないのは生前の自分に思い当たる所があるからだろうか。

法国での魂を癒す数々の経験さえも、自分の身体ではないのだからノーカン、などと弱気の虫が顔を出したりもする。

そして、理解はしている。あなたはちよつと背伸びしたくなっただけなのだ。完膚なきまでに叩き潰されれば嫌でもわかる。

あなたは耐え忍び、受け入れ、この罵声に慣れることにした。

慣れれば気持ち良いのだ。罵声全体では既に気持ち良い方が勝っている。これは性癖だ。性癖に取り込みさえすれば、あなたは負けな

い。

とにかく、あなたは適応することに専念する。それだけでいい。

この女は強い。心が適応さえすれば、あなたの未来はバラ色だ。

様々な危険から身を守り、娼館に行けば一晩中戦える強靱な肉体、娼館通いに困らない程度の小遣い、そして日々の罵倒^{ごほうび}。

あなたの求めるものは何でも揃い、あなたが知らなかった気持ちよさまで得られる、最高の異世界ライフがここにある。

エ・ランテルでのあなたの休暇は残り少ないが、あなたと娼館とク

レマンティーンの素晴らしき未来はまだまだ続く。
続くものだと、思っていた。